
星の名残

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星の名残

【Nコード】

N6036G

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

時間を作ることはできるのだろうか。とある惑星のお話です。残したいものは残るのでしょうか。とある人の願いです。

始

1。

移動が止まったとき私の仕事は終わり今朝少年の死がなければ私は目を覚まさなかっただろう。少年にはすまないが私は眠っていたかった。少年には本当にすまないと思っている。きらきらとした眼をまぶしくて覗けなかった私は少年と同じ病気であることが信じられなかった。少年を蔭ながら応援していた。残念だ。憤りが私の命に傷をつけ残りの燃料を暴発させる。幸いにしてこの病気は死に際して痛みがないらしい。眠って起きなくなる死というか病気らしい。安らかな死といえば死だ。だが少年の目はきらきらしていた。

私は少年のきらきらを伝えるべく報告の文をつづることにした。私の命もやがて尽きる。宛先はまだ決めていない。妻になるのだろうか、それはそれだ。とにかく報告は私が職業として十数年こなしてきたことだ。報告を毎日欠かさなかった。例え病院のベッドの上であろうとキーボードのボタンを押すことはできる。言葉をあやつり報告を少しずつ、入院は長くなるがわずかばかりの蓄えある。日々の日当を気にしなくともよい。私は何も気にしなくともよい。今はただこれをつづることだけに専念しようと思う。

77556番 杉田章 からの報告 11月19日

着信10:21 場所 ●。駅 □線車内

本文

車両12号車 人数9人 西側座席に6人。 東側左右に一人ずつ。
入り口に初老の男手に新聞。

着信 10:35 同車内

本文

若いカップル 女が新作映画Bについて語る。車内の壁にもその映画について広告している。二人は見に行く約束をしていた。

着信 11:01 同車内

本文

家族づれ 車内から車窓をみて 子供が次々に行きかう電車の名をあてる。駅構内にとまっている新幹線の名前も出てきた。S駅の西口の家電量販店は帰りに寄る価値があるらしいとのこと。

着信 11:23 ○●町 1丁目

本文

来来軒にて食事 チャーハン670円 スープ付 餃子 250円
客は他に2人 10ほど待った。味よし。店でトイレを借りる。
トイレきれい。

店主40代 店員女性10代かアルバイト、若い。

2.

装備をしなければ道具は役に立たないのだ。攻撃力は攻撃に反映されず守備力も守備にはカウントされない。小学生のランドセルは攻撃が防御かじつと眺める。彼らは装備させてもらっている。大人はそうはいかないんだよと子供を追い越す。その分の年をとっている老練なウサギと若いカメ。自転車は嵐。赤と黒のデیفエンスをもろともしない。何人かの小学生には自力で勝っていたが集団を相手にして手こずっていたので幸いなる風の後ろ道を利用させてもらった。

電車のホームで集団に追い付かれた。額ににじんだ汗と子供らの笑顔は対照的だった。嫁の紹介で仕事に就いた。青い携帯を手に電波を飛ばして回っている。研修期間の3ヶ月を過ぎると給与が月払い

と日払いの選択制になる。日払いにすると前日の報告のポイントに応じて支払いがなされる。

正社員のボーナスとして月毎、半年毎、あるいは1年毎とにかくもたらされた情報の成果に応じた分配がなされる場合がある、らしい指から腕への筋肉がかなり鍛えられたと思う。携帯のボタン押しが恐ろしく早くなった。冗談のつもりでパーカの前のポケット内で起動し編集してみたらできていた。右腕に稲妻の剣。左手にスイカ。

杉田章は私の夫だ。なぜ彼、と周りの皆が口をそろえる。周りにもっといえるでしょう違う、と同僚は質問する。そんな質問であるだろうか、まああるからあるのだろう。会社の男性でぴんときた人はいなかった。彼にはぴんときた。女のカンねといたいところだがカンだけじゃあ結婚はできない。そこんところが聞きたいところなんだでしょうけど、自分のことがネタになって話が進んでいくのはあまり好ましくない。

彼のいいところ。たとえばぼんやりした夢や希望を誰もが持つていくべくづくに着ぶくれている。彼はそうじゃないといいはしないが、彼はあつさりその服を脱ぎ捨てる。着ているのは周りに合わせているんだと言わんばかりに感じる。それでいてふてぶてしくはなく私に強要したりもしない。彼は彼の楽しみを探している。彼は私にとって自由に慎重で安全だから好きだ。ここまでの答えを私に導かせたのは友人の楓だ。

楓からお昼の誘いが来る。楓も彼と似ているところがあるかもしれない。彼と結婚することを一番に話したのは楓だ。少し心配したことがあるとすれば彼は彼女にどんな反応を示すかだったが見たところ普通だった。楓はいいと思うと言ってくれた。

周りの反応として、結婚する前の数週間と、してからの数週間で何が違うかと言われればなぜがどうに変わったくらいだ。日々はうごめいていて、忘れ去られるのを誰もが知っている。だからその時々

にあつた言葉を話す。やるべきことは多く、仕事中心の毎日で休みすら義務化されているしてからの今日この頃。

「楓 結婚とかはしないの」

私は思い付くままに言葉を発するのが得意だ。あれこれ考えても逆にそれがあだとなる場合が多々あり、それならば堂々と真っ向勝負で進んでいきたいと思っていた。

楓のランチのパスタのフォークに対する巻きがひと廻り多くなったのを見逃さず私はレタスにフォークを突き刺した。お皿がかちっと火を打った。

「まずわざと幸を先に走らせて様子を見てるのよ」

「結婚とやらの現実と感想と知識をばいいただきたく存じて申し送り候」

楓はフォークに巻いたパスタを置いてクルトン入りのコンソメスープを口に運ぶ。

私も同じまねをするが香草が口に引つ掛かり飲み込むまで器を離せないでいた。

「あまり変わりはないのです。今のところは幸せだから今以上は望まない」

目と目が合う。

「最初のチャンスを逃さぬようにしていきとっございます」

「それはそうでございます」

紙ナプキンをとり口をふく。

実は問題があつてと楓が話し出したのは皿の中身が空っぽになっただけからだった。

コーヒーをお持ちいたしましたしうかとウェイターが訪れ、立ち去り、時計を見てお昼の就業に間に合うのかしらと不安になった。

でも楓のことだからうまくまとめているのだろうと思う。

クリスマスイブだった。いつもより早足で街に行く。ぼくは感謝する。クリスマスの日にだ。今日も継続中だ。神が神がと唱え続けた。スーパーマーケットに買い出しに行った。お金を拾うのが得意だった。下ばかり気にしていて10円やら1円やらを拾っていた。レジでこうしたお金が有効に使われ辻褄があうときこのうえない喜びを感じる。

拾いあげた代物は白いUSBで危険の前に少し興味をそそられていた。そいつがぼろぼろになっていたからでピカピカのいかにもでないことがウイルス感染等の問題にならないのではないかと判断した。そもそも接続できるかどうかだと昔のソフトの要領でふつと息を吹きかけて自分のパソコンに接続させた。

都合のよい解釈をすればパソコンは変え時であつたし何ヶ月か続いていたオンラインゲームにも飽きてきていた。重要なバックアップdataもなく特別なメル友もない。

画面が刷毛で白いペンキに覆われていく様を黙って見ていた。今年はホワイトクリスマスに違いないと窓の外を見た。

近くのコンビニに散歩に出た。チョコレートやらクリームやらを買い込んだ。予想外の出費をさせ部屋に帰還した。今月分の仕送りは使い切った。潔かった。年越しの金はもたねえ。自販機で最後の小銭をかき集める財布の中には一円たりとも入っていない。

ポストの空を確かめて鍵を回す。

冷蔵庫の中を確かめコーヒーの缶をパソコンの机に置いた。

キーボードにパーでじゃんけんを挑みスクリーンセイバーを解除。

画面はブラックだった。コーヒーの缶をよせた。マウスでクリックすると画面に文字が走った。

浸食された感は否めなかった。

ゲームのようだった

ゴシック調のローマ字は感覚で理解できる。説明書などいらない。スタートのボタンを押した。

4 .

時間とは何だ。だれが最初の9時15分を定めたのか。1秒とはなんだ。1時間がわかれば1分がわかる。1分がわかれば1秒がわかるが、1秒とは、1とは。

「教授やつぱりありませんでした」

「そうか」

森山隆文はすでにあきらめているようだった。

まさかあの取っ手だと思っていたものが解説書だったとは思ひもしなかった。

「雑誌の付録じゃあるまいしこんなところについてるなんてありえないですよ」

「そうだな」

「それで集まり具合はどうだ」

「ええまあまあです」

「そうか今日はもう遅いから帰っていいぞ。もう、そうだな11時だ」

「ええ お疲れ様です 教授は今日も泊りですか」

「ああ そうだ 明日はそうだな 9時でいいよ」

「ああすまん 人や車の音が騒ぎ出して、普段することにいつもより2倍の時間をかけるつもりでここに来なさい」

「はい わかりました では また お疲れ様です」

偉大な学術書をドイツから取り寄せていた。あまりの嬉しさに梱包された袋を乱暴に剥ぎこれまでにない分厚い辞書のような紙のブロックの荘厳な装丁に似つかわしくない人工の取っ手を発泡スチロールの片かと思いつきに打ち捨てた。いてもたってもいられず公園のベンチで最初のページを開くことをためらわなかった。重いせいもあった。小脇に抱えて尋常な重さではなかった。すぐとりに行くといい直接送ってもらえばよかったのだが、途中でなんとも気持ちを抑えがたかったのだ。

膝に置いた書を最初は物語でも読むようにめくる幸せ。指が風を起

こし森山隆文は自分が意識さえすれば神のようだったと思うに違いない。地にある蟻がベンチの木ずたいに天上へ上がり巨人の来ている綿布をたどり襟元から首筋へ悪魔の審判を下そうとしていたとしても彼は許された。

5 .

村田剛は悩んでいた。判断が自分にゆだねられ自分により気付かれている心地よい悩みだった。どうもこのままエンディングに向かうのが正しい筋なのか疑問に思ったのだった。気づいてしまった場合は正しいはそっちに向かう。もちろん向かうのだろう。正しい筋とは思ったものの正しさをもとと求めているわけではない。気づいた方に行くのが正しい、いや無難、なんと表現すればいいのか、それが表現できれば苦労しないさでも表現するか、あの親父ならわけなく答えるんだ。英語やらドイツ語やらで言うかもしれないな。村田剛はここではじめて他人を思った。このところぶっ続けてパソコンに向かいっぱなしだった。ゲームは難しくもあり簡単でもあった。波長が合った。考える範囲内で解けるなぞであったり、我慢できる基準を超えない程度のルーチンワークをすれば先へ進めた。ここまではだ。ひと段落といったところだろうか。息抜きをしよう。と開いた雑誌のページには新作のテレビドラマの人間関係図が配役ごとに↓やらハートやらで記されていた。

6 .

私が入院して5日目だった。普段日付けをあまり気にしない私が日を覚えてるのは病院1Fの売店で何冊かの雑誌とともにメモ帳を買ったからだ。最初の数十ページを白紙にして中段前から書き始めた日記がある。1。1は入院日のことだろう。入院と書かれてある。2にはタオル、下着類一式、本、コップ、はし、歯ブラシ、毛布。とあり、本とコップ、はし、毛布に。が付いてある。これは妻に持ってきてもらうものだ。

3には0630とありこれは起きた時間。4には1800検査とある。

5日目。

患者にはゆつくりとした時間に感じられるのだがその分を補って大勢の人が働いているんだろう。患者にとつて検査やら署名は仕事なのだが本日の私は自分のベットにいないなければならない時間までは休日に違いなかった。妻が私から仕事を取り上げ、携帯を会社に送り返してしまったので私は右手が手持無沙汰でしうがなかった。なれたはずのメール打ちができないのは職場復帰に対して一抹の不安を感じさせていた。ここでもできる仕事だし、ここの報告はポイントも高そうなのだが妻は許してはくれなかった。仕事と病気の因果関係が云々。長期の入院云々。どちらも5の私には知らされてはいないことだった。

私の部屋は4人部屋で私以外は向かいに1人斜めに1人で計3人の収容だった。私以外の2人は老人で朝昼晩と食事の時間が待ちきれないようだった。私もじきにそうなるんだろうかと恐ろしさを感じる。私の日課は食事をとることもだが朝にエレベータで下に降り新聞を買いに行くことだった。まあここでは誰もがそうなるのだろうがそうだった。売店の空く時間に合わせて下に行くとすでにぞろぞろ何人かの影が遠くに見える。私は15分ほど遅れていくのを覚えていた。早すぎてもいけない。そして遅くなると見舞い客の集団に巻き込まれる。

それなりの時間が人にはあるのだ。エレベータを上がり待ちきれない同室者のしをかちゃかちゃやっていらしている空気は耐え難くポケットに詰めたコーヒーを取り出してロビーの椅子に腰かける。誰もいない。テレビが設置されている方とは逆側にあるロビーは人気がない。暗黙の内に何か問題が発生した時に家族と患者と看護師などが静かに打ち合わせる場所になっているようだったが大抵は私専用だった。

朝から蛍光灯のスイッチなど押さずにブラインドを傾け新聞を読む。

一面を口に出す。今度からこれをメモしていこうかなと考えている。ゴミ箱は空に近いのでそつとゴミ箱の入口から飲み終わった缶を流し込む。ゴミ箱の入り口。ゴミ箱の入り口、と、そのとき私は口にして場を立ち去ろうとしていた。

朝っぱらから、問題が発生した人たちが3人と1人で私の脇を通り過ぎて行った。朝のブラインドから差し込む研ぎ澄まされた空気を浴びてテーブルにはコーヒーの缶のまあるい跡など残してないだらうかなどを心配した。

1人が少年だった。出会いを大切にしようとか誰かに言われたことがある。一期一会といったやつもいたがそいつは覚えていて、一期一会って漢字をかけやしないやつだった。わざわざ私が後で調べて覚えてたにもかかわらず。

7.

森山隆文が目を覚まし時計を見ると9時38分。腕の時計を見ると9時40分だった。ああ眠りすぎてしまった。今日は10時30分からと3時30分からの講義がある。割のいいバイトみたいと生徒には言われるが森山隆文は気分転換と思っている。気分転換を正當化しているのか義務化しているのか棚の上にあるバケットの包みを取る。バケットの長さで今日は木曜日であると判断できる。自分の研究だけに打ち込みたいと思っていた。だが父と子、母の三位一体の魔力の前ではそれは叶わぬ夢だ。天秤は片寄ってもいいが天秤であらねばならないのだ。割合でいえば極端はある。

若い頃はいろいろ喧嘩もしたが家族はありがたいものだと思山隆文は思う。今の場所にしつらえられているだけかもしれませんものだろう。

どこか昔の忙しくわずらわしさの名残が午前1回午後1回の表舞台だった。

バケットがなくなる明日からは集中してあの本を読めると思い森山隆文はいつもより興奮して一日の区切りであるバケットにナイフを

突き立てた。

誰かが室に入ってくる。

ゼミ生の児玉だった。森山隆文にも建前から一応の基本的権限は与えられている。社会性を失うなということなのだ。ゼミは思ったより都合よいものだった。これはこちら側だけではなく生徒側にしてもそうであるらしい。人気のゼミは大変な倍率を要するのだが森山隆文のゼミもそうだった。児玉に言わせるとほんとに人気のゼミと本当でない人気のゼミがあり本当でない人気のゼミが森山隆文のゼミであるとのことだった。

ゼミの生徒は確か15人。12や13は嫌だから15がいいと思わず発言した最初の教授会での意見がなぜかすんなり通ってしまった。裏にある力に誰もがかわりたくはないのだろう。滅多に学校にも学会にも来ず、うわさの的でしかない人間が思いつきで言ってしまったのだからむこうもたまらない。ただ一度の失敗が臆病風をふかせるのはよくあることでそれ以来、どの会にも顔を出さず、何かあればメールで決定事項の受諾と委任状の送付を繰り返していた。

メール機能は便利で時々研究以外の事で森山隆文を揶揄するような匿名のメールがくるのだがそれすらいい気分転換だった。

匿名メールだけで学内世界が構築されていく。劇場だ。きつと建築の関係者に違いない。いや絵画に近いか。

「昨日送ったメール見てくれましたか」

児玉が言う。

「ああなんだったか開いて見てくれ」

児玉が事務用パソコンを開く。

「じゃあこの名簿、総務に転送しますね、確認とかいいんですか」

「ああそうだな、転送な、んー、送ろう。頼むよ」

携帯電話と時計をゼミ生から取り上げた森山と敬虔な使徒達の冒険はどこまで続くのだろうか。

時の空間で新たな時を作り出そうとしている反逆者森山。

権限を静かに振りかざし生徒に首輪をつけるやり方。

「これで教授がイケメンで女性に人気あつたら大変ですね」
イケメンの意味は知らないがそれは大変だと森山は思った。
バケットのカスは今日も同じところにこぼれていった。

8 .

ナワンあなた好きです。

ごめんね私結婚してるの。

感情が募っていくのが手に取れた。昨日より今日、今日より明日。
避けていた。

ナワン君は優秀だ。タイではエリート中のエリートらしく研修生だ
というのに学ぶものがないかと思われた。

ここで学ぶものはないことを学ばいいのにと少々辟易していた。
研修生あずかりの部署に尋ねても詳細はしれず私の班の指導係はか
なりまいっていた。

大学で学んだ知識など社会ではなにも役に立たないといわれるが彼
は役に立たせようとする。あらゆることを超一流と言われた偉人た
ちの格言や定理に結びつける。結びつけることができる彼には仕事
が物足りない。彼はしなくともよいのだが私たちの残業に納得がい
かない。口惜しそうにおつかれさまでしたーと言い帰っていく。イ
ントネーションは良好だ。

指導係りはさあ本格的に仕事だと椅子の上で伸びをする。

「で、主任いつてくれました」

「絶対主任の言うことなら聞きますって」

「それはわかってるの」

「怖いもの知らずの幸さんでも苦手なものあるんですね」

「そうよ」

実際どうしようかと思う。

「呼び出しちゃおっか」

「そうすね」

ずいぶん先延ばしにしていたが逃げられない。

「ごめん今日先あがるわ」

「なしつけてくるから」

「えっマジすか」

「そうよ。なに、文句ある」

じゃああとよろしくーと言って会社を出た。

ナワン君に電話する。

仕事の事で会いたいといった割には私は楓を同伴するつもりだった。実は彼が最初に職場に来た夜も3人で歓迎の飲みを開いていたので2回目だった。

もともと今晚は楓と飲み行こうかなんて話していた矢先だ。楓はアジアひいきだったしナワン君のことをいろいろ私に聞いてきていたのでちょうどよい。

楓からは少し遅れるが必ずいくとの返事をもらった。

ナワン君とは近郊の駅で待ち合わせして移動した。

ナワン・スルワジラップでナワン。彼は23歳でタイのバンコク出身。父は軍の士官。母は銀行員。父を尊敬はしているが軍人にはなりたくないらしい。

今日のナワン君最初に私を見つけたとき私の名前を呼んだ以外言葉を発しない。私も移動中はとくに話すこともない。ただ考えと話し方をまとめようとしていた。

店は特に決めてなかった。通りから離れておらず見つけやすい最初がいいと思つた店に入った。あとからもう一人といい席に付く。楓が来る前に話をつけておきたい。

とりあえず乾杯して、なにか頼んどナワン君にメニューを渡す。店員がきて私はどの飲み屋にでもあるようなメニューを注文してナワン君はどうするのと促したつもりが店員があの一といいだしたとぼけた言い方だ。あの一メニューからお願いしますと言われはつとした。私は動揺してえっとえっとナワン君にメニューを借りてとにかく何でもいいから目に入つたやつを注文した。えっとナワン

君はなにっと言う前に彼は店員とうまく合わせてメニュー見ながら注文していた。ペースは悪かった。

注文が済み、ドリンクが運ばれて口をつけてさあというときにナワ
ン君がまた私の名前を呼んだ。私はビールの泡をまだ口中に付けた
まま、ただ聞いていた。

77556番 杉田章 からの報告 12月5日

着信16:01 場所 ○×公園

本文

公園ベンチ初老の老人山高帽 犬。

着信16:35 場所 ○×公園

本文

○ 運送の運転手 公園トイレより

着信16:45 場所 ■川神社

本文

雨が降り出す。自動販売機メーカー 商事 売り切れ商品

着信16:51 ○●町 5丁目

本文

傘 黒 透明 茶 の順に多い 緑1 赤1

9.

黄色いトレーナーを着た少年と灰のジャージの私は色彩的に的確だ
った。私は自分のことをあまり話すことは好きではない。相手と同

じ方向を向いて話すのが好きだ。少年はぼくは中山浩太ですと窓の外をみながら言い。私は右から左に電車が走るのを見ながら杉田章ですと名前を言い合った。それからすぐに浩太と私は言い、アキでいいと浩太は言ったのでいいよと言いつたのだった。最初から名前に関して何らかの呼び方がすんなり決まるのはかなりうれしいことだと私は思う方だ。

浩太とは食事の前に必ず会うようになった。

食事後の時間について打ち合わせしたがなかなか会う時間はないようだった。

浩太は規則正しい生活をしていて私のように休憩時間はほぼないしかなかった。学校に行けないからここで勉強していて別室では家庭教師もいるらしかった。

私は浩太の話を聞いたり内緒で持ってきた勉強のドリルの私の分かる範囲での回答のヒントを出してやった。

私はこの病院学校で浩太の授業時間と給食時間以外の学友になっていた。

こんな子が本当にいるのだなというのが私の本当の感想だった。病院には縁がなく生きてきた。

逃げ場すら決められた、追い込みの、限度ある白い輝き、病院の、私は詩のように呟いた。妻には何か漢詩の本を注文していたのだがそれらは分厚くて汚くて高いのでという理由で文庫サイズの世界の詩集一式というものがやってきた。

私はその最初の最初に書いてあるなぜか詩を作ってみましよう書いてみましよう声に出してみましようというところだけを読んで実践することにした。

短歌が五七五七七で俳句が五七五。私は最近覚えたことを浩太に自慢げに教えてやろうと考えた。

7はラッキー7ではない。私にとってはそうであることにうすうす気づいていた。7は魔法がない、神がないことを本気で憤っている私自身を振り返らせる数字だ。

3回の表、浩太は来ず。お昼は妻と浩太を待った。3回の裏は一人だった。

暗い夜だった。浩太の部屋を聞いていたし行ってもよかったのだがまだそうするべきではないと勝手な判断をしていた。

私はそれが得意だった。勝手な判断は、だから7をラッキーとはしないのだ。

次に会ったとき浩太は急に病気を思い出したようになっていた。今まで私は浩太の病気について聞いていなかった。自分中心に考えていて浩太は私より若いし私より元気なのだろうと思っていた。

浩太との接触が1日に1回となり。3日に1回となり。私は浩太のことが心配でいざというとき私の勝手な都合で浩太の部屋にいてもいいかと伺いを立てた。

そこに行ってしまうえば浩太の病気のなんらかが明らかになるような気がして非常に怖くはあったけれども事態は風雲急を告げていた。

浩太の口から病気のことは聞きたくなかった。

私は妻を頼った。何か面白いもの、お前のセンスで子供向けの面白いもの頼む。いいか本気で言ってるんだ、冗談じゃあない、本当に頼む。オレを助けてくれ。妻の携帯の留守電に伝言を入れた。普段は絶対にしないことだった。オレを助けてくれなんて。それは少し冗談ばく聞こえるかもしれないと反省した。

10.

オレと繋がりがあるのはなんだ。パソコン、仕送りをしてくる父、コンビニ、スーパー、自動販売機、ゲーム、水道、ガス、テレビ、携帯。行っていないが所属している学校。この部屋。隣の部屋と隣人下の部屋と上の部屋のやっぱり隣人。くらいか。

こうなった原因はなんだ。劣等感。あきらめ。見切り。不満足。お金。家族。自堕落な性格。安定。安心。一人が好き。くらいか。

たまに同じことを考えて答えてみる。村田剛は部屋で大の字に寝転んで上を見る。蛍光灯はまぶしい。目を閉じる。残像が残る。目は

覚ましているはずだ。体は動くし頭も働く。

必要な食事と睡眠。しばらく言葉を発していない。それは気がかりだ。

冒険をするとなればなんだ。近所の銭湯に行く。髪を切りに美容院へ行く。同じく服を買いに行く。大学にいく。くらいか。

部屋の掃除をして風呂に入り爪を切りジャージに着替えてパソコンに向かった。ゲームの続きだ。まだ答えが出ないでいる。同じところをぐるぐる回っている。もう敵はいないかと思われた。謎はないかと思われた。そんなところで迷っていた。

静かな時が流れていた。向き合う自分が見られているようだった。だからこそ一瞬で評価が下されるのを戸惑った。右か左か。赤か青か。ただのゲームだが生活の割合としては重要だった。ここがポイントだとわかっているだけにそうだった。

裏を取るか裏の裏をとるか。

クリアしたい。

クリアー。

ゲームをクリアするという言葉を子供のころから使ってきた。

クリアーって何だ。

最期をみることが終わらせることが。

終わらせるといえば大学に行っていない。確か単位とかあったはずだ。4年で卒業するはず。終わらせたゲームなら数十と転がっている。この前整理したから10の棚が4つ。単位足りてるじゃないか。そういうことだ。どうなるってこのまま行きたいし行くしかないように思う。

大学からも就職セミナーのお知らせメールやら何やらが山と来るようになった。ここを出るつもりはある。気分転換にはなりそうだ。仕送りを貯金していくか。しかし億劫だ。外にでると様々な交渉がたくさんあり人は交通以上に渋滞している。この陣地を一生守り続ける。パソコンやテレビや必需品の買い替えぐらいはしなければならぬ。親父はいまさらなんとも言わないような気がする。

このまま。ただこのまま。

少し眠くなってきた。

削除の川に中の不要物を流し込んでそれらは消える。

11.

ボタンと音がした。力強かった。森山隆文は満ち足りていた。鼻からふーっと息を出していた。世界は美しいと安易にでも思ってしまった。息が続く限りは平安。この時がずっと続けばいいのだがと呼吸を何度か繰り返す後に対価が発生する。求められる。支払いが発生する。おまえはそれだけの秘密をかき集めてなにもできないのか。どれだけの時間を費やしているんだ。何をやっているんだ。お前はメールの通りの人物に違いない。返せ。かえすんだ。

森山隆文は強迫観念にかられた。

小さな自分が震える。象牙の塔に立てこもる賢者はその塔に窓があるのを知っている。窓は賢者がつくっていない。塔もそうだ。中の家具も、守りの扉も、鍵も、郵便受けも、執事を雇っているのも賢者にあらず。

なぜ賢者とよばれるか、そうとしか呼びようがないからで、塔の名前がそうだからだ。名を付けたのも賢者ではない。

進んで賢者の塔に入ったからだ。住人と呼ばれないのは少しばかりの仕事を身内の権力者から与えられているからだろう。

塔の中の研究室に集められた時計の数々。受信機であり発信機。

時を掲げる。時を掲げたいのだと森山隆文はいつになく意識して望みの言葉を絞り出した。

壁中に並べた時計は一秒ごとにずらして60ある。

閉じた本の付箋部分を再度開いてみる。

時を作り後にそれを計る場合、その後の分の考慮は必要であろう。計りながら時を作る場合にも、その考慮は必ず活かされる。

「今日はもう帰っていいぞ」

「風邪か」

「ええ お疲れ様です 教授、本の方はどうでしたか」

「すばらしい 明日はそうだな 休みなさい」

「じゃあ代わりのものをよこしますんで 買い出しはこれで」

児玉は3番の箱からメモを取り出そうとする。

「カラです」

「そうか 4番で」

児玉は4番の箱からメモを取り出す。

「この前の卒業論文のことだが君の言う通りがよいと思う」

この時代に手書きの論文とは刺激的なことだ。

「ええ最後くらいはですね 少し苦勞をすべきですよ。自分の手で」

「ああ」

「そのあれだ、君の口から全員提出するようと、大事なのは提出することだと。内容はまあ、あの、それだ」

「私が皆を卒業させたいのだということを伝えてくれ」

「わかりました ありがとうございます」

優秀な副官は怠惰な正官のもとにあり、私が歴史に名を残すとはおいそれとも言えないが名ばかりの正官が歴史には数多くいたのだろ
うなと想像する。船に乗り肘をかけ椅子で居眠りをして酒を飲み港
に着く。日の光を浴びおいしいものをたくさん食べまた旅立つ。

森山隆文はひとごとのように大学の事務をこなす自分を顧みる。

私の仕事は別にある。自分に言い聞かせる。

準備はできている。作業はこれからで、まずは第一の時計に取り掛
かる。

改めて開きっぱなしの本を閉じる。

ボタンといい音がした。

12 .

「どんな果物が好き？」

何の暗号だろうか、突然こんなことを聞いてくる。

私は混乱する。

「りんご、みかん、なし」

そんなもごもごを口に出しながら

「なし、かな」と答える。

回答になっただろうか。

その質問はそれきりで終わった。

朝だった。浩太は新聞をみて新聞おもしろい？と聞いてくる。私はおもしろいよといい毎日楽しみだと答える。

病院での一番の楽しみが売店に行くことだ。週刊誌の発売日を覚えるし新しいお菓子やジュースにすぐ飛びつく。新聞は毎日新しくなる。

テレビは見ないの？と浩太が聞いてくる。今日はいつになく質問が多い。テレビは少しうるさくてね、音もだしチャンネルもいろいろありすぎるしね、あまり見ないよ。でもニュースは好きだな。だからさ45分とか55分とかちょうどの時間とかはテレビをつけるんだ。なぜという顔を浩太はしている。

なんでニュースが好きといわれても面白いからだろうね。ニュースは。時々自分のためにニュースがあるような気がしてくるよ。驚かせたり楽しませたり。

浩太も新聞作るよ。でもニュースもいいなあと浩太は言った。

浩太の新聞がでたら毎日買うよと私は言った。

浩太のところに買いに来る？と浩太は言った。

私は真剣に考え、そうだな、近くだったら買いに行くけど届けてもらったりはするかもよと答えた。

ねえ今度部屋に遊びに来てよ。

と、浩太が言った。

金曜日の3時と時間が指定された。

たぶん、その時と、はにかんだ笑いをみせた。

完全に決められている時間をあいまいにしてみせたのだろう。

あいまいな私に合わせた回答だった。

私は広げた新聞を丁寧に折りわきに抱えコーヒーの缶だけをゴミ箱に投げ込んだ。

金曜日まで浩太には会えなかった。会いに行くまで会えなかった。

ごめんなさいの紙がポケットに折りたたまれた。

妻が珍しく連日病院を訪れた。

私はなんだかまだわずかな月日しかたっていないがこういうときは離婚の話だろうかといかぶんだ。最初の日に着替えやら頼んでいた本やらを持ってきた。いろいろ注文するけどこつちも忙しいのよとは言わなかった。ものは揃っていた。私の妻は優秀だ。

その日はただそれだけで終わった。訪れるという行為だけでだ。

次の日来た時はどうしたのという言葉はどこで発するかばかり考えて接した。

少しさびしくてという言葉が妻の口からでるのだろうか。それとも好きな人ができてとか続くのだろうか。

テレビのあるロビーで面会した。昨日妻が持ってきた新しいジャージに着替えていた。割と赤似合うのよねあなたと家にいるときのように言う。

ねえ明日髪切ってあげようかと妻が言う。

急にどうしたともいえない。

私は周りを見回す。どこもかしこも家族だろうか塊になっている。

笑顔があったり、渋い顔をしたり。大声で話したり、黙ったり。

検査のね結果がでたのと妻が言った気がした。

私はすっかり病院で暮らしているだけかと思っていたが入院していた事に気づかされた。

本当に恥ずかしかった。あれこれ検査していたのは調べるためなのだ。その答えが出た。

で、どうなのと妻に聞いたが金曜日になお医者様が直接あなたに話したいって。私も少しは聞いたけど難しくてわかりませんと言った

らしかたありませんねって、まずは本人に説明してそのあともう一度私も一緒に説明を受けられるんだって。

妻が難しいというのを私なんかがわかるのだろうか。

金曜日、浩太との約束は果たさないと、3時。3時だけを確認。

「私が急に来だしてびっくりしてるでしょ」

「ああ」

「楓がね、出ていったの」

「梶原さん」

「そう」

「でていったって、会社辞めたってこと」

「そう」

「それでね、寂しくてね」

「仕事は大丈夫」

「ええ 優秀な部下たちがいるんで大丈夫」

「今の時期はあまり忙しくないしね」

梶原さんってあの人の人だよ。私にはずいぶん昔のことのように思える。妻の一番の友達。家にも何度か来た。

妻と私との話題はあまりなかったたので妻は梶原さんの話をしばらくしていった。

私は妻に浩太の話をしてあげた。妻の話の後には何か気が引けたが少しだけ空気が和らいだ。

妻とあったころのことが思い出された。

もしかしたらこの繰り返し返しが妻との関係になる予感を感じた。

最初に戻った。これで一周。

楓さんにさ、返事書いたの？書いてさ、持ってきてよ、投函くらいならできるから。

仕事いいつけてよ。

妻は笑った。

77556番 杉田章 からの報告 1月13日

着信02:36 場所 ○×ホテル

本文

向かいの消防署より消防車出勤。

着信03:33 場所 コンビニエンスストア○×

本文

客誰もおらず店員がトイレ掃除中。

着信03:45 場所 24チエーン■屋

本文

客一人は黒のダウンジャケットに黒のニット帽
もう一人が外国人 南米系かと思われる。

着信04:01 ○楽町 6丁目

本文 掃除している若いホストに挨拶された

13.

裏の裏を取ることに決めた。レベルは十分すぎるほどだった。

睡眠という休養も十分とった。何度か扉を開いたがこれまでのように迷路はなくなたまっすぐに広い道を進むのみだった。門をくぐり
ゴールする。

Yokutadoritukimasitane

そついうことを言いたいんだろうと思う。

かたかたかたとスクリーンセイバーが起動し文字が躍った。

なぜゲームと関係ない方向に事が進むのか知れなかったがパソコン
が浸食されているのを思い出した。

画面を戻すと一番最初には戻りはしなかったが悩んで止めたところ

に戻っていた。

逆か。と思い裏を取ってみた。

やっぱりこっちが正解かと思うような迷路のような回廊。スタートに戻っている気がしないでもない進行。これまでの折り返しですべて逆逆に進んでいけばいい進行。

案の定、スタートに戻る。スタートの時は振り返られなかっただろう後ろ側からスタートに出た。

なるほど。と村田剛はつぶやいた。

負け惜しみではなく。そう来たかという気になった。

やる気になる。そうこなくては面白くない。

しばらくスタート地点から動かなかった。

眠くはない。何かのはずみで解答はでるだろう。でているのだろう。画面を離れ電気ポットで水を沸かした。

ごぼごぼと水の沸く音が好きだった。蒸気が立つのも好きだった。

あと10分が3分になり沸騰が完了した。

その間スクリーンセイバーがまた起動して画面は真っ黒になっていた。

10分もせずにスクリーンセイバーが起動するんだなと理解した。

コップにインスタントのコーヒーを淹れながらもしかして、ここまでする必要があるのかどうか知らないが、直感でそう思った。

時間に関係しているのか。

開始時刻、門を開く時刻、潜る順番、進む時刻、止まる時刻。

自分の直感を信じて進むのはゲームでなければすぐはずかしいことと思うがゲームなら誰にも見られず試すことができる。

村田剛は時計を取り出し最後のポイントの各地点でスクリーンセイバーの起動までの時間を調べた。最初の扉を開くまで9分。扉を開いて次の扉までの間が10分。なぜ違う必要がある。ビンゴだと興奮は隠せない。何かあるのだ。次の広く長い道はなにか別の意味がありそうだが15分。最後の扉が18分。道があり門がある。くぐればゴール。

よくたどり着きましたねで終り。

引き返すことをせずまずは門をくぐる。これまですべてのスクリーンセイバーを起動させてきた。それにより何か反応があるかと思っただが無事終わり。

また戻ってきた。

ただそうなだけじゃない。何かある。計った時間を使うのだ。

9・10・15・18 足してみた。52分。すべての扉の前で52分待ち進んでみた。

52を今度は4で割り13分で試した。

長い道の通り順を変えた。道の真ん中でなく左側を歩いた。次に右側を歩いた。

組み合わせを何通りか繰り返した。

時は経った。

日も経った。

あつけないものだと思った。

時計を見る。今日も11時くらいからはじめて、もう6時か。外は明るくなっていた。ゲームをしていると時間がたつのは早い。7時間から8時間、これは仕事だ。

ちよつと外の自動販売機で甘いコーヒーでも買ってこようかと上着を羽織り外へ出る準備をする。小銭をつかみ。靴をはき。ドアを開ける。日の光が目突き刺さる。朝日だ。

閃いた。ドアを開けた瞬間か日の光を浴びた瞬間かは知らないが、部屋に引き返した。

画面を光に当てればいいという神秘的な発想は今さら試すはずもなくこれがだめならそれしかないだろうなと思いついた。スタート地点に主人公を戻した。6だろうと思った。6だった。村田剛はとりあえず眠った。

日の光を画面に当てる夢は見ないで済みそうだった。

少年は最初は学校の先生になりたいと言っていた。それから新聞を作る人になった。子供の頃はよくあることだ。私は自分が何になりたかったかを思い出そうとする。私は魚屋さんと答えたはずだ。家の近所の通りには魚屋さんがおりそこをよく通っていたからそうになったのだろうか。とにかく縁もゆかりもないものになるうとはしない。

少年はまだ物心つく頃から病院を渡り歩いているらしい。父親が病院の院長とも聞いた。学校にも通ったことがないのだという。勉強は専属の家庭教師がついて教えているらしい。学校の先生はその人の影響なのだろう。

新聞を作る人は私の影響か。

私は新聞記者を教えればいいのか出版社を紹介すればいいのかかわからないがこのままでよいと考えた。

新聞記者になどならなくてよいのだ。出版社の勤め人になどならなくてよいのだ。

新聞を作る人でよいではないか。

私が少年の症状を初めて見たのはとある土曜日の朝だった。

私は病院で一番早く走った。なぜかという少年はごめんなさいといったからだだった。寝ぼけたままでふらふらだった。私は寝坊して起きたばかりだと思ったのだが私に倒れかかって来たのだ。

そして私は読みかけの新聞を枕に少年を寝かせ看護師を呼びに走った。

大勢が駆けつけ担架が運ばれて少年を部屋に運んで行った。

死んだかと思う寝息だった。

「死ぬんですよ」と医者と言った。

「こおやって死ぬんです」

「いつになるかはわかりません」

「起きなければこのままです」

「今回は大丈夫でしょう」

ですが、こおやって死ぬんですと医者は繰り返した。
あなたもですよという意味なのはわかった。

私は構わないと思ったが少年は少年だった。

少年は少年なのだ。

ずいぶん前から起きていられる時間がすくなくなっているのだという。

私にはまだ自覚症状はない。

「痛くはないのでしょうか」

私は聞くのだが。

医者らはもう答えない。

部屋を出ていく。

看護師が点滴を打つ。小さな手が管を注意して布団にしまいこまれた。

痛くはない。食欲がなく水を欲するのが自覚症状だ。

少年の部屋の本棚は空になった。

家庭教師は暇を出された。

テレビの上の写真集と窓辺にある玉がレールをぐるぐる回るおもちゃは残された。

私の妻が選んだものだった。

部屋を立ち去るとき梨のにおいがした。

せめて病気は治らないまでも時を戻して何度も何度もその度に時をもどして私くらいになれば一番幸せだろう。

このくらいがちょうどいい。

妻の来る時間だった。

幸せと不幸せが半分づつだった。

15.

時を作るために1秒を作るために時計を60個。60個の時計から1秒づつ切り取ってやる。60分の長針用にもう60個。短針用にもう12個。132個の時計で時間はあつまった。あとは作業をし

ながら時を数える用に自分の腕時計が1つ。133。とりあえず150集めるという目標はあながち間違っではないことが証明された。ベースとなる17の時計のうちのひとつを解体していた。

周りは涼しいのに汗をかくことがある。森山隆文は発熱していた。短針様の12個の時計のどれとも合わないかつ12時間内という時計を作った。

長針様の60個の時計のそれとも合わないかつ60分という範囲内の時計を作った。

壁に掛けられた60の時計のどれとも合わずかつ1分という範囲内の時計を作った。

17分の1個目のずれは何と1時間12分だった。17分の2。17分の3。徐々にタイムを縮める。神はこのずれをこそ1秒1分と聞いたもう。何かを呪文のように唱えていた。17個すべての時計を解体した。最終的にずれは13分51秒までできていた。訓練による技術の向上を意味するものだった。

時を刻ませるためには1秒以上かかるし、時をつなげるのにも5秒はいる。時を閉じ込めるのにもまた時間がかかる。

森山隆文のもう一人は最初から何をやっているんだとのたまう。お前は何をやっているんだ。時計屋か修理か解体か。

ドイツから取り寄せた本の系譜につながっている森山隆文は連続した動作を一瞬で同時に発揮するとは呼吸と同じであるとつぶやく。

ずれの13数分は世界との遅れ。世界の最先端を走るものとのずれ。残りの51秒は神の領域。

若かった森山隆文が発言した言葉が脳裏によぎる。きらめきをきらめきの時期に出せる奴っているもんだよ。学生生活に合わせた成長社会に適合した成功。その時の試験に適合した正解。順調ってやつだよと酔っている自分が見える。若かった自分はどうしてだろう。地図のどこにいたんだろう。

森山隆文は10の指に着目した。石をはめ込む指、蓋を閉じる指、とじこみながら起動のカギを残してくる指、スイッチをはじく指、

針金で指を巻き、はんだで針やらピンズやらを固定する極小のアイムを作る。

10の指に10の機能を持たせ挑む。掌で物を移動させる。

すでに何をやっているのだという意識はなく若かりし頃の森山隆文も本とつながった森山隆文もなかった。静かだが突っ走っていた。ぐしゃりと掌が閉じられた。指に巻いたものはすでに煩わしさだった。巢から卵を探すように自分の掌を探ると塊があり動いていた。それはただの時計のように森山隆文には思われた。

気持ちを言葉にすると「まさに時計だ」と声が聞こえていた。

16.

明日食べるものをよせておく。貯金をためる。未来のため。未来はわからないって言うのにわからないことを確定させたい。だからといってすべてを確定させるなんて望んでいない。新しい社会があるはずだ。それを目指している人たちがいるはずだ。このままでいいはずがない。今といっしょにいてはいけない。

会社の理念だった。幸はそう解釈していた。

ナワン君日本の女性なら誰でもよかったんじゃない。社内の噂に私はとやかく言う資格はない。私と楓の仲を知っている人はこの件に關しては口をつぐむ。

私がナワン君に告白されたことは誰も知らない。

あの日、2回目の会だった。

楓は来るなり空気を察してアイコンタクトをしてくる。マナー違反だが2人してトイレに立った。告白と、仕事についての二重の拒絶を済ませていた。ナワン君はもう何を言ってもはい、はい、としか反応しなくなっていた。目だけはもつとものごとを言いたそうにしているのだが聞く耳をもたなかった。

席に戻り私が楓の援軍を得て心安くなったのが楓はよく思わなかったのだろうか。

私は三人の会話を作ろうとして話題を提供しようとしていた。なぜ笑っているようにみせるかわからない。なぜ仕事の話をしたのかわからない。なぜ私を呼んだかわからない。さんざんに楓に言われた珍しくメールでなく電話がかかってきて勢いに負けた。ナワン君にもだが楓にもお願いといいたかった。お願いだから私を助けてと言いたかった。

それは言うことを聞けということ、はい、はい、とうなずくことですか、二人の声が聞こえてくる。楓はナワン君の連絡先を聞きこれから電話するからと許可をとるみたいないかたをした。幸は何にもわかってない。だとかなんとか。

何を言われてもいいが、それほどに怒っている理由がわからない。怒りの大きさと私の行為は対等なのでしょうか。何か勘違いがあるのではないのでしょうか。

怒るって怒ったもん勝ちつてところあるよね。私にはOLの愚痴話しか味方になってくれないのでしょうか。

楓とは不連絡になり避けられ、ナワン君ははい、はい、とうなずくだけになった。

ありがとうございます。たすかりました。かわいい後輩の職場環境における感想も私の味方だった。ひどく疲れた。

ナワン君が定時で帰る。私は忙しいふりをする。事実忙しい。やならなければいけないことは山とある。やっておけばいいことも無限にあり、私は仕事のせいにした。

帰っても旦那はいない。やるべきものは仕事、自分。

日常は繰り返すのでこのまま時が解決するのだろうと思っていた。ナワン君の送別会の計画もされていた。みなナワン君の実力を認めている。彼はやっぱり出来るよ。使える。なんて私からすれば傲慢な言い方を若者は平気でする。

楓とはあれつきりだが、今までの経験上時間が解決してくれると信じていた。

楓からメールが来た時はどきつとするとともにほつとした。時が来

たと思った。

私会社辞めます。ナワン君とタイに行くことにしました。

私は怒りにまかせて楓に電話しそんなこと許さないと演技でもできればどうなるかしらと変なことしか考えなかった。

時が来て、終わったと思った。楓が離れていくのだ。

私はいつもこんな時止めることをしない。すべは考えるのだが行動できないし発言できない。

こんな時はいつもやってきた。それはただ来るのだ。無料なものだから買わなくとも借りなくともよい。

息をのむ。このことに対して私は目を冷たくすることができ。ますます向き合うことができる。そいつに対して私がにらみを利かせているうちに背中越しに仲間が消えていく。

振り返るとだれもない。

さらに振り返るとにらんでいた相手すらない。

冷たい炎はまっすぐに私の胸を打つ。

心に穴が空くという表現が好きだ。

的確だと思う。

こういうときに隣にいてくれる旦那からの留守電をきき救われる。旦那にも同じ風を感じる。けしていなくならない。私はいなくならない人が好きだ。

17.

時を得なかった。村田剛が起きると午後の6時で日は沈んでいた。

問題が解決していたので気が楽になったのかすべてがルーズだった。明らかにになったことがありあまりに明らか過ぎて、明日やろう明日やろうとなって取り掛かれないでいた。

外に散歩に出かけて疲労を無理やりつかみたいのだがまだ興奮が冷めていないのか帰っても寝付けなかった。逆だった。地球の裏側を歩いていた。

午前6時に起き。9時の扉を開け10時まで長い通路に行き15時

におやつを食べる。18時に仕事を終える。

ポイントは4回。時間を12時間弱用意する。その前後に補充時間は必要だが自分みたいな人間がこなすにふさわしい仕事が出来ない時を合わせるためにどこかで無理をするか、ちょうどいいところまで寝るかだ。最初の寝るのは失敗したので、徹夜しようとするのだからいいところで我慢がきかなくなる。

そんなこんなの毎日だった。ゲームを拾う前に戻ったみたいだった。朝起きると11時だった。どれだけ近づいてるのかも離れているのかもわからなかった。そのまま2度寝して起きると朝の7時だった。信じられないかもしれないが事実で、自分の周りの月と太陽はどうなっているのか確認したかった。

7時は惜しいなと眠りすぎて頭痛の頭が考える。

部屋のチャイムが鳴る。幻聴だと感じたとしてもおかしくはない。止まるなら止まれくらいのもゆるやかな動きでドアに向かう。

扉を開けると男が立っており、どうもはじめましてと言った。

村田剛はこいつなんだと思うと同時に見下されているという思いにかられた。年は同じくらい今はやりの格好。話し方がテレビの誰かに似ている。

何を言っているか最初は聞き取れなかったし声が出せないで委縮している自分を悟られないようにしていた。靴のかかとを潰した素足だけが動かせる唯一の自分でそいつはもぞもぞしていた。

わかりました。

疑問形だった。はい。としか言えない。

相手は部屋の中をちらつと伺いだした。

じゃあ 頼みましたよ。これだけは絶対ですからね。目がマジだった。

なにかこの人に自分はしたのだろうか。

帰ろうとする男にあの、と声をかけることができた。

足は止まったままで体が傾くのを手が支えた。

それ持って9時。いいですか土曜日ですよ。と欲しい答えはもらえ

た気がしたので見送った。男は階段を下りて行き。一度もこちらを振り向くことはなかった。玄関から裸足で帰り扉を閉めた。どきどきしてまず顔を洗った。手を拭いた。扉の鍵をし足を洗った。

急に何かと繋がった感じだった。あれは世間だ。自分が見ているだけの世間から何か催促されている。見つかった。世間のすべてから自分の悪事が暴かれた。そして呼ばれた。

渡された封筒は洗面台に乗せたままパソコンに向かう。なにも出来ない。ベットに横になる。テレビをつける。音を消ししばらくながめる。

9時。土曜日。何を、それを、封筒を、封筒の中身は。

立ち上がり、大学の封筒であることを確認し中身を見ると卒業式の案内だった。

18 .

看護師の話によると少年は毎日勉強を欠かさなかったらしい。検査の度に注射をし、頭に針を打ち込まれ何だかわからない機械の中に入ったりすることも欠かさない。私は個人的に注射がきらいで聞くだけでもいやな話だ。病院も嫌いだし、歯医者も嫌いだし、病院と歯医者に嫌いなところは自分に理解できない機械があるということだ。理解などというと私が頭のよい方の方と思われるかもしれないがどちらかといえば世間を狭く絞り込んだなかでも中の下といったところだろうか。

医者は機械や道具に精通していて欲しいと私は願う口だ。医者は私より頭がいいから間違いがすくないんだろうと思う。道具も病院はお金があるからちゃんとしたものを使っているんだろうと思う。一番怖いところはどうしても医師と機械や道具が仲が悪いように感じるところだ。

私の個人的見解はここではさておき、少年は怖くはなかったのだろうか。怖さをどこに隠しているのだろうか。今を見、明日を見る瞳の力は本当に少年のものなのだろうか。

何月かに一度くる父親との面談を少年は非常にうれしそうにしていたという。なぜなのだろうか。母親はいないのだろうか。兄弟は。笑顔は本物だ。

なぜあんなに前向きでいられるのだろうか。

19 .

自分の時間を手に入れた森山隆文は机の上を整理するとかねてからの計画を実行に移そうと決めた。すでに別人のようだった。もう思い通りにならない。この大学をでる。

学校をつくる。公には私塾。子供たちを育てるのだ。

辞表をたたきつけてやる。

教授会だと。卒論だと。授業だと。ばかばかしい。関係ない。そんなものはなかった。自分はそんな世界はまっぴらだ。見たくない。学内でぎゃあぎゃあ騒ぐ学生連も講義で居眠りする大半も私の足を引っ張っている。

森山隆文は時計を手にし目覚めて人格が変わったようだった。これまでの自分が遠くにあり、知らずと押さえつけていた自我が新たに目覚めてきたのだった。

学部長にメールを送る。辞表を5分で作りテキスト形式にして送る。その足で大学に赴いた。ドアをたたく。メール見ましたか。見てない。なぜです。机の上のパソコンは飾りですか。森山隆文は学部長の机にむりやり上がりこむ。君何をするんだ。学部長のしわだらけの細い手のおいがする。触れるのを払いながらメールの画面を開き閲覧する。見られてまずいものがあるわけではないでしょう。メールの閲覧というあなたの仕事のほんの一端をお手伝いしているのですよ私は。

学部長は目を剥いた。これが森山か。ついに本性を現したか。椅子を引いて体をのけぞらせまだ見ている。これをご覧ください。今日

付けです。受理くださるようお願い申し上げます。

それでも森山隆文は収まらなかった。なぜ反応がない。判断できないのですか。学部長。ここにメールの受信時間がありますね。今は何時です。時計をお貸ししましょうか。

ほら45分は経っております。あなたはこの時間いったい何をしておいでですか。

私が会長と懇意なのはご存じでしょう。どうしますか。私が伺いますか直接。あなたの顔を立てなくともよいとおっしゃいますか。さあ、何かあったらいかがです。

あなたは一人では何もできないのですか。この部屋はだれのお部屋ですか。私はこの大学を出ていく。あなたはここにいます。それをお認めになりますか。

学部長は震えていた。

つまらない。つまらない人だ。森山隆文は2回口に出していった。

ジャケットの前のボタンをひんむいてやった。前がはだける。なんだお前は。

なんなんだよ。ボタンを床にたたきつける。

ボタンが転がり止まるのを見つめる。いいか会長を呼べ。お前が決められないなら会長を呼べ。オレの研究室にだ。今日から片付けに入る。すっかりきれいにしてやるから待ってるって伝えるんだよ。

わかったな。

あんっ。

学部長の首の神経が緩んだ。

オレの時間をかえせ。おれの時間をかえせ。

あのやろっ。

今に見ている。何か証拠をつかんでやる。

このままでいいものか。

20。

楓からの手紙。

幸元氣ですか。私は元氣です。日本語を忘れそうな毎日なので手紙を書きました。しばらく付き合ってください。そしてごめんなさい。私は今バンコクのサラデーという街に住んでいます。今幸せです。不幸せという言葉が異国で翻訳できないからかもしれません。よくいう人生リセットの意が分かるような気がしています。前よりも（笑）もつと身軽になった私が正直います。積み重ねたよどみがどこに行ったかというところと幸のところに最後のいたちっ屁をしてしまったのかもしれませんが。幸にならねたまれてもかまいません。でもどうか他の人にはいわないください。贅沢ですね。日本はどうですか。旦那は元氣ですか。仕事より旦那を大事にしてください。PSでもまだ半年も経ってないじゃないというお声が聞こえてくるようです。またそのうち手紙します。勝手ですがよろしくです。押しが強くなった楓より。

定番で楓とナワン君の幸せそうな写真が入ってあった。

仲直りの時が来たという事だ。すこし遠くなってしまったけれども元通り。私は日本、楓はタイ。女の幸せとは言っていないけど楓は望んでいたものを一気に手に入れたのだろうか。失ったものはないのだろうか。苦労や不自由がないはずはないのに自由で幸せだという不幸せを見ない。幸せを見る。自由を感じて不自由を感じない。自分次第と言いたいのだろうか。

ナワン君が死んだらどうするの。

あなたは一人ぼっちで、そうならないために早く子供を産みなさい。私の旦那は死ぬそう。誰でも死ぬが、彼はそれに気づいていない。気づかせてつらい思いを抱かせるのかこのまま行かせるか。

少年の死でさらに麻痺している。私みたいに自分の所で問題を止め

ている。見える距離までで物を見る。今はなにか変な書き物を完成させたみたいだ。遺書だろうか。

彼に自分のことが書けるのだろうか。

私は思っただけの自分に気づいた。

心配ない。明日起きて仕事に行き。明後日に病院に行く。次の週からは仕事はフレックスで午前は毎日病院に行く。

その次の週は午後から毎日病院に行く。

彼には私が必要だ。私には彼が必要だ。病院は病気を治すためにある。治療にはお金がかかる。私たちには十分な貯えがある。手術するなら手術する。もう見込みがないなら退院させる。二人で旅に行く。

あつけない。また迷いの虫がうずく。できるのか。

仕事なら判断をくだせるのに私生活がなおざりになる。仕事がつまみくっているとは思っていないのか。どっちが大事なのか。

私生活が大事。

お金になるから仕事が大事。認められるから仕事が大事。競争に負けたくないから仕事が大事。皆がするから仕事が大事。

テレビをつけてすべてを任せきる。雑誌で紹介されたお店で馬鹿みたいにならんでケーキを一人で5種も食べる。限定プレミアムワインを開ける。

乾いた肌に命がとる。お風呂にも入らずそのままソファで眠る。

毛布が暖かだ。

毎日旦那に会うこと。仕事と同等にすること。そんな強迫観念にかられた夢を見た。

21.

やっぱりお前、来そうになかったもんな。いいから来いよ。スーツの男が立っただけで部屋にあがりこむ。村田剛はオレは殺されるのかとおびえていた。

この前の男だった。スーツを脱ぎだす。着ろよと脱いだのをもを渡し

ていく。何見てんだよ早く着ろよパンツもかてめえは。わけがわからないが着替える。

男は鞆から別の服を取り出して着替える。準備はできたようだ。

これは命令。お前は今からここを出ていく。この部屋にはおれが住む。お前はさつさと大学の卒業式にでて持つもん持って親父のところに行く。

それからのことは自分の親父に聞け。

じゃあな。

動かないでいる自分がいる。

まだ何か問題があるか。お前の持ちもんなんてここにはないだろ。

みんな親父の金だ。パソコンの中身はおれが処分してやる。ゲームはオレがクリアーしてやる。

オレはお前の代わりを4年間務めてきた。これはゲームじゃない仕事だ。大人の男は仕事するんだよ。お前はなんだ。お前の仕事は何だ。

さつさといけよ学生さん。

学生さんは外に出る。

ひげもそつてない。髪はべたべたで伸び放題。9時だったか。行くしかないんだらう。

歩いて行く。何も考えられない。歩いて行く。靴がスニーカーだ。気にしない。

ゲームのことが気になる。まだクリアーしていない。確かめていない。心残りがある。部屋には悪魔のような男がいる。あいつを倒せない。現実では勝ち目がない。

親父に何が関係しているのか。

シャツの下に汗がにじむ。桜吹雪がはだけた胸に入り込む。ネクタイは必要か。徐々に仲間が増える。入学式もこんな感じでなかったか。最初は皮靴にネクタイ。部屋のどこにもないだらう。捨てたのか。ダメになつて卒業していく。卒業つてできるのか。単位は論文とかはどうした、全部あいつがやったのか、できるのかそんなこと

が。

外は埃っぽい。桜は吹くが桜は匂わない。

校舎に入り。講堂を探す。たくさんの人ごみは苦手だ。めまいがする。自分は臭くないか意識するがスーツに振りかけた香水の匂いがかすかにする。

映画館のような椅子に座る。名前なんか呼ばれやしないだろうな。隣はオレをどう思ってたんだろう。代表者が壇上に呼ばれる。どこことなくあの男に似ていた。

マトリックスか。微妙な照明と人いきれでいつも通り眠くなる。がたがたとみなが立ち上がる音で目を覚ます。スタンディングオベーション。誰だ。あいつか。

暗闇のホールに光がさす。ホールの出口に人が殺到する。村田剛は出る人を通すために席を立ったが人の流れに逆らい前の列の空いている席に座る。ぼんやりと覚醒していた。周りの人がなければ眠っている。人の移動が空気の見えない流れを作りそれに浮いてしまうのを逆らうための存在の重さを維持するのに疲れてしまっている。自ら沈み息を殺す。暗がりの底で対流が収まるのを待った。卒業式にでて親父のところへ行けと言ったが証書がその場で手渡されたわけではなく、額に刻印をおされた訳ではなかった。ここに来ても来なくともわからない。証明は何もない。式に参加するだけなら一般でも変わらない。4年間自分の代わりを務めた男もそうだったのだろうか。

外に出て光にむしばまれた体はうれしそうだった。桜を感じる心はうれしそうだった。

ただ心と体以外の自分だけが別の意志を持ち動いていた。もとい、動かされているのだ。

スーツのポケットにはむき出しのお札が数枚と小銭があったのでその分での移動は可能だった。

病院に訪れてどう会えというのだろうか。

最初にはいった受付をあえて見逃し院内を一周して元に戻った。無

駄な行動だなどおもいつつ用件を伝える。声が小さいのか怪訝そうな顔をされるが名前をだすとあつとした顔になり承っておりますという事になった。父はうけたまわせる男なのだ。

でも、あつとした表情はあるんだなと思ひ。待つていた。

奥で取り次ぎをしてすみません、すぐには時間が取れないとのことですので別室をご用意しております。そちらでお待ちください。

受付が受付のカウンターから外へ出て前に立つた。

職員用のエレベーターで上へ上がった。別棟へ渡る通路をとり部屋に通される。どうぞといわれてソファに座る。

では、今しばらくお待ちくださいませ。

座りながらはいとええの入り混じった会釈をして扉が閉まつて一人になった。

22.

地方の大病院の院長のひとり息子。ただ正妻の子ではないらしい。少年の立場は微妙だが病気のせいで一般の世間とは隔離されているため少年がどこまで状態を理解しているかわからない。

当病院の院長ですという人にインタビューできた。聞きたいことだらけだった。

私は少年の父と懇意にしている関係で頼まれて少年をお預かりしているのだと、非常にお世話になっている人でもあるので大事に扱っているし最大限で最新の治療を施すと同時に立派な大人になるために教育も怠らない。とにかく誠意をつくしているという点を踏まえた上でという話になった。

私が私の主治医に告げられたところによると私の病気は少年のそれと同等のものらしくそれにかこつけるようにして少年の死にもかこつけた感じになったのだが、詳しく知りたいと迫ったのだった。

院長がお会いになるそうですと主治医の説明があつたがこの件からは一線を画す態度だった。

少年は8歳を一期として亡くなりました。

治療はわかりやすく言えば夢を見させる薬で行われました。他の病気を全く受け付けない代わりに副作用で眠くなる。死に至ることすらある。

私は思いました。病気自体が眠くなり死に至る病なのではないのですかと。

院長はそうだと丁寧に答えました。

薬が病気の進行を促進させているものでないとだれが言えましょうか。少年は病気で死んだんですか薬のせいで死んだんですかと問いただす。

病気です。

あなたはそうでないかもしれないが、病気によって死を意識させられます。どうですか気分は。はじめは混乱し理解もできないでしょう。しばらくすると何かやり残したことなどを考えだし、いてもたってもいられなくなります。こんな病院にいてもしょうがないとみな考えます。

例えばそれはあなたの例としては言えるかもしれませんが。ただ少年にやり残したことがあるでしょうか。残したことがあるでしょうか。少年は少年といえど大人のような理解はできませんが本能的に察するのです。動物的な感といえます。明日が真つ暗なのです。太陽が上がってきません。たとえ上がってもですよ。これはたとえです。わかりますね。未来がない。将来がない。のです。大人になれないのです。なれないまま死ぬのです。日常に支障のない範囲で少年を学校に通わせたとしても、周りと違うことを意識させてはなりません。また周りの大人のようになりたいと思わせてもなりません。ああ、そうですね。ありませんという言い方は適切ではありませんでした。本能の話です。

本能が死を予感し成長が止まります。薬は死を促進させるものです。が死に向かったのアクセルのようなものですが車は動きます。

治療しない車は動かずじっとしているでしょう。動かない車は道路

には置いておけません。

仮に駐車場に置いておくとしましょう。自分が車であることを認識した車が駐車場に止まっているのを堪えられると思いますか。

私は少年の件では適切な対応だったと自負しております。

ところで、この件に関しまして私からもお話があります。

私は少年もそうですが、あなたもです。あなたがたの病気については第一人者です。さきほどの例ではありませんが、あなたは大人です。ので病院をでていつでも構いません。奥さんもおありでしょう。ですが、こんまま入院していただくことはできないでしょうかというお願いです。

検査をいろいろうちの方でしたかと思いますが、これを今後もつづけます。

薬も処方いたします。入院費用は病院ですのだから私がお支払いたします。

私は少年に同情しその話が適当にしか思えなかった。妻に相談しますの考えもなくまあしばらくはここにいますと答えた。すでに薬を飲まされ夢を見ているのかもしれない。少年が飲んでいた死を忘れる薬。病気を促進させる薬。夢を見させる薬。

あれこれ考えが浮かんだ。

院長は続ける。

ただし言えることはいつかは発症し死に至るということです。傾向は徐々に起きている時間が短くなってくるのですがそれはほんの一例にすぎないかもしれません。なにも確実なことではいえません。ありまえん。これは死に至る時期の話です。

それは明日かもしれませんし、50年後かもしれません。

私は思わず顔をあげ、皆と同じということですねという目をし院長はそうだと見返した。

希望ではなかった。それは院長も知っていた。

なにかそのための研究の実験みたいなものなんだと思うとなおさら少年への同情心が募るのだった。

少年はなくなっているのにそれがおかしくないのはおかしいと自分に言い聞かせながらもわかりましたと答えていた。
それともう一つ。

あなたがこれまで書いた論文のことですがと院長はいい。
なぜそれをと私がいう間にこれまでの分で結構ですからとやわらかく提出をうながされその日のうちに看護師を通じて院長に渡っていくことになった。

参考になりますと院長はその時はじめて私に頭を軽く下げた。

23.

大学のことはどうでもよかった。かつとした気分もすこしは収まった。不思議だった。ただし朝から病院の隣の棟の職員用入口を張っていた。

案外つかまるもんだなと思った。黒塗りのセダンだが普通の出勤時間と思われる。

降りたところを左斜め後ろから寄っていった。

刺してやるというような気配だけは出していたのかもしれないが、相手は悲壮な男の危機感回避は避けて通りたかったに違いない。

まあ落ち着けと言われて、待合室に通された。

金を貸してくれ。大学を辞めた。学校を開くのに金がいる。1千万だと、自分でも愚かなことしか言えなかった。

1千万で学校が開けますかと院長は言った。

学校でなくて私塾のことですよねとも付け加えた。

よけいな言い方だ。

森山隆文は言い返した。

さきほどの続きだ。お前は金がある。余っているくらいだろう。いったい何に使っている。そんなに持っていてもしようがない。俺にはやりたいことがある。協力してくれ。だから金を貸してくれ。学校を、いいかたはどうでもいい。学校をつくるんだ。

貸してくれって言うよりはと院長は言いかけて森山隆文は踏み込んだ。

お前悪いこともやってんだろう。俺は知ってるよ。身内だしな。それに一応身内の俺が悪さしたらお前も困るんじゃないか。

ほんとにどこかで聞いた台詞がすらすらいえた。これはテレビドラマかと思うくらいだった。

ただ本当だった。学校を作り若い子らを教育したいのだ。

それをなぜ言えないのか。それは帰って気づくことだ。今でない。

これを担保にと向き合った机の上に懐中時計を置く。ごとりと音がした。

どこにもない時計だ。俺の時を預ける。俺が作った世界に一つの時計だ。

お金がいる。まとまったお金が。金は俺が生きているうちに返していく。なあ、それでいいじゃないか。言っているうちにそう感じてくるから不思議だ。

この手の類はよくある事だと院長はいったが、いいですよとも言った。

森山隆文は学校を開くことと時計を返してもらうことと院長を陥れることを同時に始めるのだと意気込んで礼をした。

24.

部屋の机の電話が鳴る。

受話器からひさしぶりだな、私だとの声がある。

急用で行けなくなった。仕事を用意してある。今日からこの部屋を使いなさい。

引出しを開けなさい。マンションのカギだ405号。窓から見える向かいのビルだ。そこを使いなさい。

お前パソコン得意だったな。情報管理の仕事だ。大半は海外に委託している仕事だが規模を小さくして日本でも行うことにした。情報

を集約し毎月一度私に報告すること。

建前はお前がリーダーだが仕事上の上司を一人そのうち送る。やり方は彼と相談するといい。ベテランだ。仕事が多かったら人を雇ってもいい。ただし2人までだ。報酬は2番目の引き出し。会社の通帳に毎月金を入れる。その中でお前が運営する。2人分の給与もそこから支払うこと。もう一人のやつはこちらで支払う。

じゃあ、とりあえずやってみろ。

と、電話が切られた。

しばらくパソコンを開いてカードゲームをこなした。木製のおおきな事務机にパソコンが備え付けられているのは新鮮だった。新しかった。

新しいパソコンは中身がいっぱい詰まっっていて熟れすぎの感はあるがそれなりに美味しそうだった。与えられるものとしては悪くないし木からもがれてへたが上手に切断されているところを見ると干し柿をモチーフとしていた。

床にほったらかしにされた線をつなぎネットに接続した。

繋がってほっとした。

ドアがノックされ男が一人入ってきた。

杉田です。

あのえつとよろしく願います。

あええこちらこそ。

私の携帯ありますか。机の中にあるからと聞いたのですが、確かに机の中に携帯があつた。

青いやつですと杉田はいい慣れた手つきでいじっていた。

赤、青、黄色、黒に白、携帯は机の引出しに綺麗に並べてあつた。

携帯代理店の気分だった。

で仕事は何をと杉田氏に聞くが、えっわかりませんとのこと。預かっていた携帯をかえすとのこと。ここでしばらくバイトをするところを言われてきたそうだ。てっきり元の仕事ができるものだと思つてました。

杉田氏は語る。元の仕事とはときくと、携帯を使っておりとあらゆること、どうでもいいこと思いついたこと役に立ちそうなこと、とにかく24時間メールで送るのだという。そのポイントに応じて報酬が支払われる仕組みなのだという。

村田剛はパソコンを開いた。

前の所有者が使っていたのか容量は半分くらい使われていた。

メールを開くと受信に30分くらいかった。切断していた分を取り戻そうとしていた。

つまり、報告はこのパソコンに届くようになっていたと推測された。杉田氏に何でもいいからメールしてくれると促した。

だがこのパソコンには届かない。

杉田氏にメールを見せると、ああとうなずいた。これはいい情報です。レベルが違う。ここに送られてくるのはポイントが高い情報なのだという。

ありとあらゆる情報が報告されてくるわけだがそれはここではなくここに届くのは整理されたそれなりの情報じゃないですかとのこと。はあ、ためになりますね、なるほど、こういう情報は確かにいいと杉田氏は声に出す。自分の情報ポイントが低いのがこれを見るとよく分かるのだという。

で、これをどうしろと杉田氏に聞くがそこまではわからないという。すでに数百件のメールが溜まっていた。明日もまた送信されてくるのだろう。

これを管理して報告するのがオレの仕事か。

とにかく、わかったようなわからないような気がして部屋の中とパソコンの中を物色し始めた。

ちよつと外にと村田剛は言い残して杉田の前から姿を消した。

通帳を記帳。マンションに入る。家具電化製品一式モデルルームのような仕様。段ボールの中に服が山になって入ってある。

さすがに冷蔵庫の中は空だ。

一眠りしてシャワーを浴び服を着替え仕事場に戻る。

やることはあった。

通帳の金額を見てびっくりした。毎月の振込額は半端な額ではなく、さかのぼると半年は引き出されていなかった。半年前は誰かがこの仕事をやっていたんだろうか。思う間もなく電話が入る。

25 .

児玉に頼るのはおかしいが連絡すると経緯をおしえてくれた。いつもと違う押しのある雰囲気、自分を感じて混乱しつつも話してくれた。内緒ですよとこの手の類の男が使った言葉だったが、違う雰囲気はお互いさまじやないかと思った。

携帯に電話すると同じ建物の同じ通路で相手が話しているのだ。顔を見合わせた。男は村田といった。ここで仕事を始めるらしく、私が見合せていた。男は村田と聞いた。ここで仕事を始めるらしく、私が丁寧だが執拗なものであるというのが理由かは知らないがアルバイトで雇ってもらったことになった。

そのうちに秘密をつかんだ。仕事をしながら計画はたてるが金さえ手にいれればあとはどうとでもなる。児玉はつかえる。村田という若者だっけといずれはオレの下で働かせてもいい。

すべて物事がとんとん拍子だ。あたりまえだ、今まで何をやってきた。何を時間かけてきた。進め。とにかくやりたいことをやるのだ。ぼんやりしている暇はない。俺にはあいつのころまで行く資格だ。つてある。あいつと俺の違いなんてない。

塾を開くプランを提案してほしいだと、どこに何人集めてどんなことをするだと、わからなければお金は出せない。ごりっばだ。君の言うとおりのオレが悪さすれば困るだ。

まったくだ。それは事実だ。理論で正論だ。

26 .

夜は赤や黄色や白で彩られていた。電車が動き外を見ていた。途中でさびしい駅もあった。駅前のロータリーで信号が点滅していた。自動販売機が二つ並んでいた。過去を超えたところに立っているのが今で未来へ向けた先端にいるのが今で電車を降りた足が今の一步。会社に長期休暇申請を出して受理された。今は旦那についていたい。

杉田幸はそう思った。

楓からポストカードが届いた。

彼になんて伝えよう。

リクライニングブツダ。

もしかしたら私は彼はつながっていないのではないか。理解できたと思ったのは幻。一時の夢。本当は私のことなんとも思っていないに違いない。私がこようが来ないが関係ない。

私は行く。なんと言おうとも行く。

なにもやらなくてもいいんじゃないかと。

今やってることのすべて。

全部削除だよこんなもの。抹消したっていい。

情報を整理して報告。なにを聞くんだ。

何に利用するというんだ。

どうでもいいはずだ。

こんなことは。

病院に同時に人物が集まった。ようやく集まったときにはもはや遅い。時すでに遅しと言っやつだ。役を割り振る。この劇を劇にするためには

女と隆文。息子と杉田氏。

児玉。

隆文

女

剛

杉田

の順につぶれていく。

自然とだ。

私があり、その間には長い列ができる。世間があり常識や慣習、法が私を守る。連中はその下にあり。私を脅かさんとす。

ひっくりかえるわけにはいかないのだ。一縷の望みももたせないし、自ら向こうに関心も持たない。

ほんとうに好きかってやりやがる、人は皆そうだ。だからその、私の建前だ。

少年の死に心いたまぬわけはない。少年は私だ。少年はなぜ死なねばならなかったのだ。

許せない。大勢のものが犠牲になればいい。私は私の病院で少年を救った。できうるかぎりでしかなかった。口惜しい。私は私の病院で多くの人を使う。病院以外でも使う。

犠牲にする。私は私の救いたいものだけを救う努力をする。私の仕事だ。どれくらいの人数がいようが構わない。私は少年のようなものをこそ救うのだ。

幸、眠くなってきた。こんなどうしようもない私を支えてくれるのはお前だけだ。

幸、こわくはないがお前が一人になるのがつらい。

どうして私は一人にならなければならないのだ。やり残したことは二人で過ごす時間だ。

どうしてそれにきずかなかったんだろうな。時間はいくらでもあると思っていた。

カザフスタン、タイ、シンガポール、韓国。メールのドメインは多種多様。現地に日本人が派遣されている。いくら日本語ができるとは言えニュアンスがジャパニーズだ。それくらいはわかる。

毎日よくあきもせず送ってくる。ゴミの分別と一緒に最近はその思ってきた。丁寧に分ける。無茶な梱包はしない。決められた日に出すこと。

少年が生きていたら私の妻を紹介しよう。自慢できる。少年は死ん

だ。

杉田さんの変わりなんだけど俺がしようか。
で、おれの変わりは森山さん。できるよね。

杉田さんは奥さんとここをでるべきだ。二人で旅に出ればいい。

そしてさ、携帯あるでしょ、それで報告してよ。情報を提供して、
うちの社員だし、奥さんもさ携帯持つて、二人でさ旅しながらいい
ね。

二人はいいよ、うらやましい。きっと病気も治る。俺が病気になる
んだ。薬をもらって眠ってなにか夢を見る。楽しみだ。おれはどん
な夢を見るんだろうか。

きっといい夢だ。杉田さんの言う少年の夢だったり、奥さんの友人
がいる外国の夢、森山さんの研究の夢。そしてあのゲームの夢。こ
れは俺だけにしかわからないのだけれどもね。

あのゲームは。

さあ6時だ部屋のドアを開ける。次は9時まで会社の門をくぐれ。
調子はどうだ。すこぶるよい。10時まで仕事をして、3時まで休
もうか。いきなり休みましょう。5時にドアを開け6時に閉める。
それでクリアーなはずだ。まちがいない。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6036g/>

星の名残

2010年12月18日14時09分発行